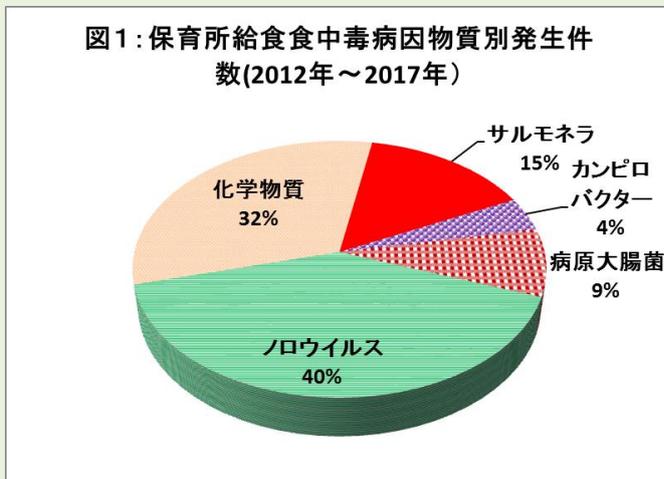


## 保育園給食と老人ホーム給食の食中毒の特徴

### < 少子高齢化で若年者と高齢者の食中毒に注目 >

#### ◎ 保育所給食と老人ホーム給食の病因別食中毒の比較

グラフは2012年～2017年までの病因別食中毒事件数です。図1は保育所給食の食中毒です。

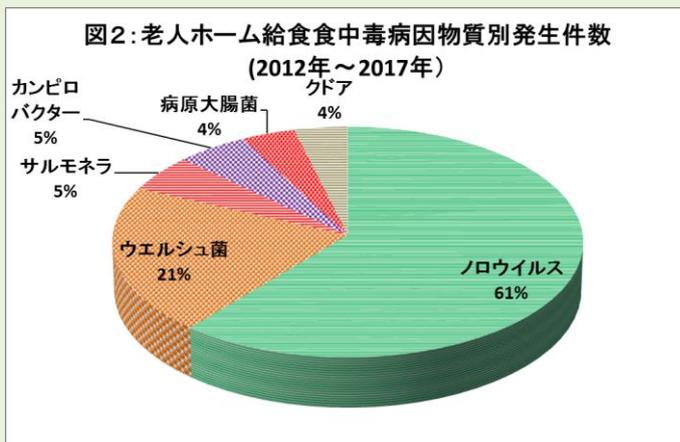


保育所給食食中毒の病因物質の第1位はノロウイルスで40%です。次に多いのは、ヒスタミンによる化学物質食中毒で32%となっています。

図2の老人ホームでは、第1位はやはりノロウイルスによるもので、61%にのぼっています。そして保育園給食では発生していないウエルシュ菌が第2位で21%に、また、ヒラメの寄生虫クドアによる食中毒が発生して

います。それぞれの特徴について考えてみます。

#### ◎なぜ保育所給食ではヒスタミン食中毒か



ヒスタミン食中毒は、アジやイワシ、サバ等赤身の魚に多く含まれるヒスチジン（タンパク質を構成する20種類のアミノ酸の一種）がヒスタミン産生菌によってヒスタミンに変化し、食品中に一定量以上蓄積することにより発生する食中毒です。タラやタイ、サケなどの白身魚のヒスチジン含有量は百グラム当たり数mgから10mg程度ですが、赤身魚は700mg～2,000mgも含有してい

ます。

食べてから30分から60分で顔面特に口のまわりや耳たぶが赤くなり、頭痛やジンマシン、発熱などの症状がでます。重症にはならず6時間から10時間程度で回復します。

## <ヒスタミンについての感受性の違い>

表1は保育所給食におけるヒスタミン食中毒の事例です。表にある2013年9月の東京都の事例では、原因食の「イワシのつみれ汁」からのヒスタミンの摂取量は14~33mgほどでした。過去の食中毒事例での大人の発症量は大人一人あたり22~320mgと報告されています。

この事例では、大人よりも体重の少ない幼児が喫食したため、少ない摂取量で発症したものと推定されています。

3番目に多く発生している魚の寄生虫アニサキスは、2013年から食中毒起因物質に加わり、医師からの届出が増加しました。また、魚介類の運搬や冷蔵技術の向上により、魚を生食する機会が増えたことでアニサキスに暴露される機会が多くなり年間を通して発生しています。

表1: 保育園給食におけるヒスタミン食中毒の原因食品等(2013年から)

発生日	発生場所	原因施設	原因食品	摂食者数	患者数
2017年12月20日	山形県	保育所給食	ブリの照り焼き	118	22
2016年9月21日	島根県	保育所給食	サバの生姜焼き	71	21
2016年7月5日	兵庫県	保育所給食	サバのカレー風焼き	130	28
2016年2月3日	兵庫県	保育所給食	いわしのつみれ	245	13
2016年2月3日	東京都	保育所給食	つみれ汁	136	4
2016年2月3日	八王子市	保育所給食	つみれ汁中のイワシ団子	137	8
2016年2月2日	奈良県	幼稚園給食	イワシのつみれ	287	9
		保育所給食		170	31
		保育所給食		155	25
2015年9月17日	埼玉県	保育所給食	サンマの一夜干し焼き	34	23
2015年8月4日	広島県	保育所給食	サバの味噌煮	73	21
2015年8月3日	北海道	保育所給食	サンマの蒲焼き	57	17
2015年7月30日	東京都	保育所給食	イワシ焼き	69	29
2014年7月28日	宮城県	保育所給食	さんまつみれ汁	74	24
2014年3月24日	埼玉県	保育所給食	イワシのつみれ汁	70	22
2013年9月18日	東京都	保育所給食	イワシのつみれ	不詳	109
2013年9月17日	宮崎県	保育所給食	サンマのかば焼き	116	14
2013年7月4日	佐賀県	保育所給食	シイラのホイル焼き	133	12
2013年3月15日	島根県	保育所給食	イワシ団子の甘辛	112	18

資料:厚生労働省 過去の食中毒事例一覧、2016年奈良県の事例は奈良県の発表より

## <ヒスタミン食中毒を予防するには>

調理室では信頼できる業者から①鮮度の良いものを購入し、②検品後は直ちに冷蔵庫で保管します。③冷凍魚は解凍したら短時間で使い切るようにし、解凍と凍結を繰り返さないようにします。また、切り身やつみれの状態で暑い所に放置されないことがないように、迅速に調理加工することも重要です。

ヒスタミン産生菌は低温でも増殖するので赤身の鮮魚類は冷蔵庫でも長時間保管することは危険です。その日に必要な量だけ仕入れるようにします。

ヒスタミンが蓄積しても味も臭いも変わりませんが、敏感な人は舌がピリッとするようです。発症までの時間も早いので、調理済の赤身魚を味見し、異常を感じたら提供しないようにすることも重要です。

同じ原材料を使用したと推定されるイワシのつみれによる食中毒が発生しています。使用する赤身の魚で事故が起きているかどうかの情報を収集することも重要です。

## ◎なぜ老人ホームでのウエルシュ菌食中毒

図2のように老人ホーム給食食中毒ではノロウイルスに次いでウエルシュ菌が20%占めています。

表2は、2012年から老人ホームで発生したウエルシュ菌食中毒の一覧です。原因食品は煮物やスープ、シチューなどのウエルシュ菌定番の原因食品と、かき玉、チラシ寿司などとなっています。

表2:老人ホームにおけるウエルシュ菌による食中毒事例(2012年～2017年)

発生年月日	発生場所	原因食品	摂食者数	患者数
2017年2月9日	名古屋市	調理提供された2月9日朝食	97	39
2017年5月21日	新潟県	白滝の有馬煮	112	41
2016年1月5日	大阪府	鶏と根菜の煮物	202	95
2016年3月19日	山梨県	調理提供した19日の昼食	52	32
2016年7月18日	熊本県	鶏煮(7月18日昼食)	42	33
2016年8月4日	滋賀県	カリフラワーとエビのくず煮(給食)	54	20
2016年10月22日	埼玉県	21日の昼食「かき玉うどん」	195	32
2015年9月12日	京都府	不明(昼に提供された食事)	158	24
2014年5月12日	大阪府	里芋の鶏そぼろ煮(12日の夕食)	85	19
2014年6月9日	滋賀県	不明(夕食に提供された給食)	112	59
2014年8月21日	兵庫県	コンソメスープ	95	48
2014年10月30日	愛知県	シーフードシチュー30日の夕食	29	24
2013年4月1日	京都府	不明(4月1日の昼食)	109	52
2013年5月15日	徳島県	昼食のちらし寿司	96	54
2013年7月24日	大阪府	不明(提供された食事)	27	15
2012年5月1日	福岡県	不明(提供された食品)	204	39

## <老人ホームでは3食を提供、前日調理が多くなる>

老人ホーム給食では入所者のために朝昼夕と三食の給食を提供しているところが多く、メニューも煮物が多く前日調理が避けられなくなっています。一方、保育所給食は昼食がメインで基本的に前日調理せず当日調理、当日提供となっています。

ウエルシュ菌は、酸素が少ない環境を好む菌(嫌気性菌)で、芽胞(がほう)を作ります。芽胞の状態では熱や乾燥に強く、一度の加熱では生き残ります。

また、至適発育温度が 43～47℃と他の細菌よりも高く、増殖速度も速いため（分裂時間は 45℃で約 10 分間と短い）、加熱調理食品が徐々に冷却していく間にウエルシュ菌は芽胞から発芽し、急速に増殖します。そのため、前日調理した食品の保存状況に不備があり再加熱が不十分な場合に多く発生しています。

マニュアルでは当日調理と決められていても、メニューや人手との関係で前日調理を余儀なくされています。

### ＜季節に関係なく発生するウエルシュ菌食中毒＞

一般的に細菌性の食中毒は、夏場の気温の高い時期と言われていますが、ウエルシュ菌食中毒は加熱調理した食品を冷却する際に増えるため、室温、気温、季節に関係なく起きる可能性があります。

### ＜煮物やカレー、シチューが原因になる理由＞

これまでも、里芋のそぼろ煮、カレーやシチュー、八宝菜、肉じゃが、スープなど、肉類、魚介類、野菜及びこれらを使用した煮物などで起きています。

カレーや煮物などの中心部は加熱で酸素が失われ無酸素状態（嫌気状態）になることと、大量に調理すると冷却に時間を要し、発育至適温度を長時間保つため、ウエルシュ菌にとって発育しやすい環境となります。

### ＜当日調理にも注意を＞

最近の事例では、当日調理でも嫌気状態 45℃ほどで保管したことによって食中毒が起きています。調理後にそれほど長く保存していない食品でも起きていますが、それはウエルシュ菌が短時間で急速に増殖するためと推測されます。

### ＜ウエルシュ菌食中毒の予防法は＞

一度に大量の調理した場合は 60℃以上で保管するか、急速に冷却します。冷却に時間を要する場合は、攪拌しながら冷却することによって予防できます。（空気のある状態では増殖できないため）

前日調理した食品は喫食前に 75℃1 分以上の再加熱を徹底します。当日調理でも至適発育温度の 43～47℃で 2 時間以上保存しないようにします。

## ◎ヒラメのクドア

老人ホームでは、特別メニューで刺身やヒラメなど、魚介類の生食がありますが、保育所では生食は行われなためクドアの食中毒は発生していません。

参考資料：厚生労働省食中毒統計

平成 27 年度第 2 回「東京都食品安全情報評価委員会」報告資料

東京都食品安全健康センター年次報告書

文責 食の安全と公衆衛生 主宰 食品衛生アドバイザー  
笹井 勉（元墨田区食品衛生監視員）